

徳山毛利藩菩提寺大成禅寺草創の由来

会員 小 西 武 司

山号を般若山と呼ぶ大成禅寺は禅四宗中の最大、臨済宗妙心寺（京都花園）派の一等紫衣寺（妙心寺派四五〇〇の末寺を特例、別格、一等〓八等に格付）で、開創は徳山毛利初代藩主就隆公七三才の時（七八才没）延宝二年甲寅四月で、今から数へて三〇五年前である。公が死期の近いを悟って菩提寺の建立を思いたったともいわれている。

開山は、大本山妙心寺塔頭竜華院の竺印和尚（当時臨済宗中の善知識といわれ、後妙心寺管長に住持した）。中尊釈迦如来、右脇侍に白像に坐乗姿の普賢菩薩、左脇侍に獅子に坐乗した文珠の両菩薩を配した所謂三尊仏を安置する。歴代徳山毛利藩菩提寺であるが、もともと富田在の観音寺という小庵を寛文十年（三〇八年前）に移建して大成院と称していたものを藩の菩提寺に改建したものである。

当寺が上述の如く禅宗寺院として、又禅の専門道場として七堂伽藍を兼ね備へ、周防国首坐として発揚されたのは、七

代就馴治世下の天明元年（二七八一年）から文化文政（一八二八年）頃と推定される。

初代就隆は延宝五年（一六七七年）「大成院諸事定」「大成院御牌前被猷之諸色之覚」等を寺に下付し、毛利家先祖元就、隆元、輝元、秀就等の崇祖勤修を命じ、ついで三代元次も又元禄四年（一六九一年）寺内の掟を定め、先祖の忌日の祈祷勤行の励行を命じ、寺風の昂揚につとめている。

徳川幕藩制下では、かつての鎌倉、足利幕府時代のように臨済宗諸派は幕府の威光を傘に「曹洞土民臨済將軍」と威張る事は出来なかつたが、それでも藩公菩提寺領二五〇石（藩創設時には宗藩からの付家老として桂美作神村豊後のように千石から千六百石取の士分も、一時期いたが）は家老に次ぐ馬廻役の上席であり、今も本堂棟瓦に見られる一引三つ星の毛利家紋所を頭に戴き、二つの末寺を従へ（その一お弓丁の澄泉寺は蛤御門の変の責任を負され、宗藩の安泰を急じつつ

若き命を捧げた、長州藩三家老の一人国司信濃自刃の寺) 周防国首坐の権勢を誇ったものである。

その権勢を裏書するかのよう「防長風土誌」「山口県寺院沿革史」「禅宗要鑑」等々には「伽藍の宏壮、白亜の輪奐遠く之を望み街道(現速玉松保町のバス通り)の往復者仰ぎ見て、嘆賞せざりし者なかりき」と記述している。

次いで、周防国首坐の実態について物語るものは、故十八世達摩和尚が生前に散逸したものを収集された、寺宝古文書・出土品等々、現至道和尚への口伝寺伝等々があるが、これらによれば明治維新迄は現東川以東、東山慶万泉原池の内全域六千七百坪の広大な寺域を有し、山門から本堂に至る参道には巨杉巨松が生い繁り、禅宗様七堂伽藍が建並び、藩公菩提寺というよりも臨済禅の専門道場として栄えた事が、伽藍配置図等によって実証される。寺領として現栄谷、一の井手(城山)の山々も記載されている。

特に注意をひく事は、寺の東方丘に在る毛利家歴代藩主墓中の初代就隆公夫妻の墓碑を覆う霊舎の本瓦葺(平瓦と平瓦の継目を丸瓦で覆う方法、豪壮古建築に多い)に見られる如く、重厚な本瓦葺の堂塔が建並んでいた事が、昨年の堂塔の建改修工事の際、土中から数多く出土した瓦片等によって、改めて実証された。

次に明治維新迄の寺の運営はどのようなものであったであろうか。禅宗寺院の常として世襲任職、妻帯は許されず大本山妙心寺(開祖関山慧玄無相国師により臨済禅の心髓が伝えられている。世に之を応・燈・関という)から紫衣一等到にふさわしい俊僧が任命派遣されたようである。維新の衰退期に十二世として任持した中原鄧州師(つねに南天の杖を持ち歩いたので、南天坊と呼ばれ奥州松島の瑞巖寺にも任持した)などは、近世の禅界の傑僧であったようである。

前述したように歴代藩主から寺風の昂揚を強く求められたのと、臨済禅の地方専門道場として雲水修業参禅の場としても、周防国の首坐であった。また藩公菩提寺の為、当然臣下百姓、町民の門信徒は許されず、只々毛利家先祖の供養勤修に終始したようである。徳山藩政充実期の三代元次の元禄から正徳の間一六八八〜一七〇〇年間と、七代就馴、八代広鎮の天明・寛政・文化・文政の一七八一〜一八三〇年間が、藩政の隆盛に併せて、寺運の最盛期であったようである。

徳川幕府の大政奉還、明治新政府の樹立に伴い、寺の衰亡が初まる。即ち、同二年の廢藩置県で二五〇石の食禄を失うと共に、毛利家の仏教をすてて、神道への転宗があり、菩提寺としての栄光を一举に失う。新政府の排仏棄釈、寺領の没収の痛撃を受けた。一戸の門信徒をもたぬ為と、排仏棄釈の

目の仇とされたのが主として禅宗であり、特に権力者に連らなつた寺々は、或は焼き払われ取りこわされている。一軒の檀家がない以上寺の存在意義が失われ、堂塔伽藍の大半が解体され、一時期無住寺と化し荒れるに任されていた。寺歴三〇〇年といえば周防国では、寺歴の古さを誇り得るものではなく、又今迄述べた栄枯盛衰の歴史の中で、寺宝寺域の売喰い、無住時代等の関係で寺宝古文書等が悉く散逸して、今日見るべきものはない。

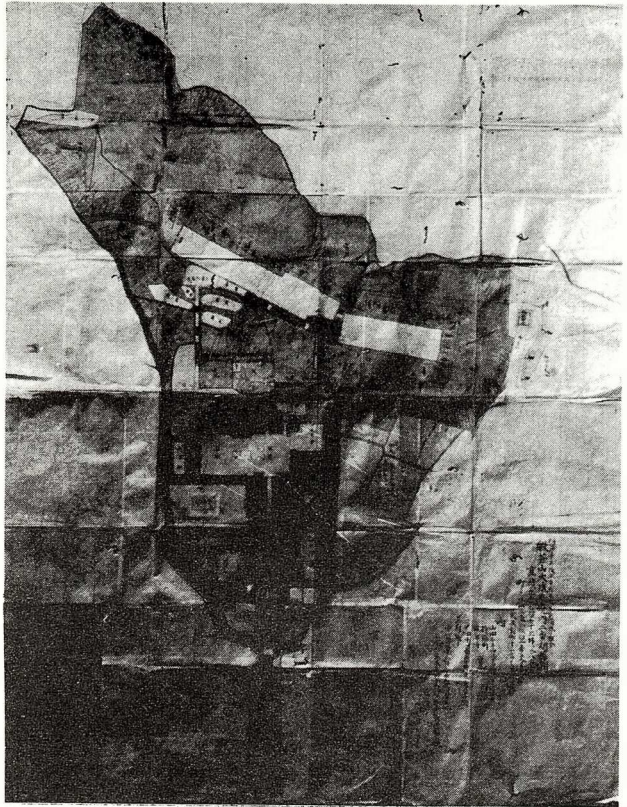
山門左側の馬頭観音立像は、戦前都濃郡一円の牛馬の霊を葬う為、駅前無量寺境内にあつたものが昭和十八年軍の強制疎開で当寺に移されたものである。その奥の祇園社（寺の境内に鳥居が建っている）、一見奇異に感ずるが、これは維新前迄の神仏混淆の名残りである）は寺の創建時の地鎮社で寺社建立作法で東南隅にあつたものが明治初年移築されたもので、遠石八幡宮の末社である。古風溢れる五輪塔は、空輪はあそこから、火輪はこちらからの寄せ集めで、調査の方法がない。本堂向拝に掲げられている扁額は、一部の書によれば葉室大納言の筆とされていますが、年代的に見て約五〇〇年の差があり、信用しがたいし、墨書・刻銘もなく、作年筆者共に不明で解明の手掛がない。また唯一つの貴重な寺宝として伝へられている大涅槃像図は縦横四米弱の実に堂々たる

ものである。収納箱の朱銘から見て、享保十九年（一七三四年）頃の作品と思われる。

（昭和五四年三月一日例会発表）



大成寺伽藍配置図
(藩制後期)



大成寺堂塔間取図
(藩政後期)

